



=発言する米田青森電気分会分会長=

青森支部は、3月24日(日)青森市・労働福祉会館において、第6回支部組織拡大対策会議を開催しました。会議には、地方本部より佐々木書記長・菊池組織部長・浜田教宣部長、盛岡支部から佐々木委員長・佐藤書記長も参加しました。

支部はこの間、5回の組織拡大対策会議を開催し、組織拡大の意義や課題について討論してきました。こうした中、青森駅連合分会では、昨年6月に引き続き今年1月13日に拡大を勝ち取り、3月5日には八戸運輸分会で組織拡大を勝ち取つてきました。会議では、拡大を勝ち取つた分会の取り組みを学び合い、職場の現状認識を出し合い、具体的な取り組みを行う意思統一を図りました。(報告は笹山賀賀青森支部組織部長)

最初に、阿部支部委員長が「組織拡大は全組合員で取り組む課題である。今日の会議で色々な議論を深めて今後に向けてほしい」とあいさつ。次に、地方本部佐々木書記長から「定期地方大会で、組織拡大の取り組みを決め、各支部での旗開きでは前段に総決起の場として会議も開催したい。自らの組合員だけの利益を求め、差別を求めるのは労働運動といえない。國労は、全社員のための運動を進めてほしい。少数に甘んずることなく、スピードを持って拡大行動を取り組んでほしい」とあいさつがありました。

続いて、佐々木支部書記長が第1部は社員に対する組織拡大の取り組みについて、提起し討論に入りました。

討論では、「職場の新年会で話をすることになった。時間を見くことなく次の話の場を設け、職場の問題を解決するために國労に加入しよう」と説いた。それを「指導者に國労組合員も選ばれている。会社主催で指導者と見習い者の懇親会が設定されたが、他の組合からの横槍で他労組組合

=2013春闘/賃上げ・格差是正求め= 八戸・青森・盛岡地区で集会

2月26日八戸地区協議会、
20人が参加(地区協)

2013春闘勝利青森地区総決起集会

3月12日青森地区集会、
35人が参加(支部2階)

告がありました。

まとめは佐藤書記長が「貨物会社問題については、会社の経営形態が問題とされなければならない。ペア・ゼロ実施であれば労働条件改善に関しては誠意ある改善を認めています。東日本会社では、新賃金制度になつて初めての春闘であり、格差の実態を比べるの難しくなりました。これからも調査点検活動を重視し創意工夫した運動を展開して行く」と発言。最後に佐々木委員長の団結頑張ろうで閉会しました。

盛岡支部 米田 勝義

第6回青森支部組織拡大対策会議

拡大分会在学び行動の強化を

II 国労運動をしつかりと訴えていこう II



発行所 国鉄労働組合本部
盛岡地方司
発行者 藤田 庄光
編集者 齋沢 広
TEL 019-622-5021
メールアドレス nrumori@poem.ocn.ne.jp

2013.4.10
第1456号

拡大キャッチコピー
「新しい仲間づくりを
皆の力で」
「一緒に解消しませんか、
あなたの疑問。
加入まってます」

第84回メーテー 5月1日(水)

=各地区で多くの参加を!=

当面の主な日程

△4月13日(盛岡) 地方本部・支部役員組織対策会議	△4月21日(盛岡) 地方運転協議会業務委託検証交流会	△4月27日(盛岡) みどりを守り育てる岩手県民会議20周年式典
△4月16日(盛岡) 第7回地方本部執行委員会	△4月19・20日(花巻) 第84回メーテー	△5月1日(各地) 「さくら」で連想するものは受験のチラシでぎわっていたが今は無くなかった「社会人採用者が運転扱の職場に配属されているが安全について守らせることをどう教えていこうか」と思案している「営業・運転職場」「検修がJR盛岡イプロジエクト等にも取り組み、若い人との接点を多く持つてい」「職場での飲み会には参加し、若い人達との話は多く出来ている。若い人が國労に対してどう思っているのか等を知る取り組みが必要」「青い森の契約社員は理由もわからず雇用を打ち切られる人もいる」とあいさつがありました。
△4月21日(盛岡) 第7回地方本部執行委員会	△4月21日(盛岡) 第84回メーテー	△5月1日(各地) 「さくら」で連想するものは受験のチラシでぎわっていたが今は無くなかった「社会人採用者が運転扱の職場に配属されているが安全について守らせることをどう教えていこうか」と思案している「営業・運転職場」「検修がJR盛岡イプロジエクト等にも取り組み、若い人との接点を多く持つてい」「職場での飲み会には参加し、若い人達との話は多く出来ている。若い人が國労に対してどう思っているのか等を知る取り組みが必要」「青い森の契約社員は理由もわからず雇用を打ち切られる人もいる」とあいさつがありました。
△4月21日(盛岡) 第7回地方本部執行委員会	△4月21日(盛岡) 第84回メーテー	△5月1日(各地) 「さくら」で連想するものは受験のチラシでぎわっていたが今は無くなかった「社会人採用者が運転扱の職場に配属されているが安全について守らせることをどう教えていこうか」と思案している「営業・運転職場」「検修がJR盛岡イプロジエクト等にも取り組み、若い人との接点を多く持つてい」「職場での飲み会には参加し、若い人達との話は多く出来ている。若い人が國労に対してどう思っているのか等を知る取り組みが必要」「青い森の契約社員は理由もわからず雇用を打ち切られる人もいる」とあいさつがありました。
△4月21日(盛岡) 第7回地方本部執行委員会	△4月21日(盛岡) 第84回メーテー	△5月1日(各地) 「さくら」で連想するものは受験のチラシでぎわっていたが今は無くなかった「社会人採用者が運転扱の職場に配属されているが安全について守らせることをどう教えていこうか」と思案している「営業・運転職場」「検修がJR盛岡イプロジエクト等にも取り組み、若い人との接点を多く持つてい」「職場での飲み会には参加し、若い人達との話は多く出来ている。若い人が國労に対してどう思っているのか等を知る取り組みが必要」「青い森の契約社員は理由もわからず雇用を打ち切られる人もいる」とあいさつがありました。

◇ 盛岡支部春闘交流会 ◇

貨物の仲間と共に運動の展開

3月16日(土) 盛岡支部春闘交流会が国労会館4階で32人の参加で開催されました。最初に佐々木委員長が「国労は5,000円の賃金引き上げをはじめ、第2基本給廃止、契約社員及びパート社員につても社員に準じて賃金引き上げることなどを掲げ要求している」とあいさつ。

佐藤書記長が「春闘交流会は、貨物に働く国労組合員との交流の場として設定して現在に至っています。全国統一要求を柱に春闘を闘うこと

と、地域で貨物労働者との交流をする中から貨物の問題を旅客の仲間と共に、運動を構築するために今交流会を有

意義なもの」と問題提起。貨物職場から、「ダイヤ改正で人減らし合理化が進んでいます。ダイヤは旅客まかせ、営業は日本通運まかせ」「輸送混亂で仕事が増えて身体がもたない。連続3時間の入れ替え作業が発生する中、無事故を継続するのが大変」「毎年ベア・ゼロ、ストライキで闘う覚悟がある、本社前での

運動の展開

集会をしたいが、現在はハガキFAXでの抗議をしていい等の報告がありました。親の学年で、子どもの教育費を支出されることで、子どもの学習に対する意欲が低められています。教育を受けようとする意欲が高まり、逆に親の学年で、子どもの教育費を支出することと、本人の能力はもちろんあります。親の所得、親の教育水準が大きな影響を及ぼすことがあります。国立大学の授業料が、1970年代の1万2000円に比べ、現在は、50万円以上で、非常に高い上昇率となっています。当時は東京大学に進学する高校生の多くは各都道府県の名門公立高校の出身者が多数を占めていましたが、現在では入学者の大半が、私立の進学校出身者へと様変わりました。親の社会階層が影響しているのは明白であります。今の日本社会は憲法第26条で保証されている「能力に応じてひとしく教育を受ける権利」を奪つている。この間の日本の政治は政権交代しても、なお新自由主義の道へ邁進し、正規労働者を減らし、非正規労働者やパートタイマー労働者を増やし、貧富の差を広げてきた。政治が取つてきただけで、政治の力で変わっていくしかねない。政治課題は山積していますが、親の収入に左右されず誰もが自分の志す大学の合格発表を見に行ける日本にしていくためにも、7月に行われる参議院選挙を全力で闘おうと決意を新たにしている

私がこの原稿を書いている最中、東京は「さくら」が満開になつたと報じている。私が「さくら」で連想するものは受験の合格発表だ。「親の階層と教育観には相関関係がある」と言っている。親の学年で、子どもの教育費を支出されることで、子どもの学習に対する意欲が低められています。教育を受けようとする意欲が高まり、逆に親の学年で、子どもの教育費を支出することと、本人の能力はもちろんあります。親の所得、親の教育水準が大きな影響を及ぼすことがあります。国立大学の授業料が、1970年代の1万2000円に比べ、現在は、50万円以上で、非常に高い上昇率となっています。当時は東京大学に進学する高校生の多くは各都道府県の名門公立高校の出身者が多数を占めていましたが、現在では入学者の大半が、私立の進学校出身者へと様変わりました。親の社会階層が影響しているのは明白であります。今の日本社会は憲法第26条で保証されている「能力に応じてひとしく教育を受ける権利」を奪つている。この間の日本の政治は政権交代しても、なお新自由主義の道へ邁進し、正規労働者を減らし、非正規労働者やパートタイマー労働者を増やし、貧富の差を広げてきた。政治が取つてきただけで、政治の力で変わっていくしかねない。政治課題は山積していますが、親の収入に左右されず誰もが自分の志す大学の合格発表を見に行ける日本にしていくためにも、7月に行われる参議院選挙を全力で闘おうと決意を新たにしている

